

第1日目(8月26日) 午後 第1室(102講義室) (1)13:00 (2) 13:40 (3) 14:20 (4) 15:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	大学	スピーキング	長沼君主(東海大学)・金子麻子(東京外国語大学)・井之川睦美(国際医療福祉大学)	思考力と協働性を高めるためのスピーキング・タスクの開発—アカデミック及びビジネス・セッション支援オンライン学習タスク—	東京外国語大学英語学習支援センターでは、通常のグループ会話セッションに加え、身近で今日的なテーマの記事を読んでから参加し、リソースをもとにもの見方や考え方を取り入れながら議論を深めることを目的としたアカデミック・セッション及び業務経験を求めない程度に調整・足場がけされた仕事に関連した様々な課題解決場面を設定し、協働的に意見を構築し、議論を収束させていくことを目的としたビジネス・セッションを提供している。本研究では、スピーキング学習支援のため、セッション参加後に質問に答えながら議論の要旨や言えなかった意見も含めて録音することができるシステム開発を行った。また、セッションのテーマと連動したモデルを参照しながら、議論への参加を促すスピーキング・ストラテジーを学ぶためのオンライン学習タスクの開発も行った。評価の視点も取り入れながら、思考力と協働性の高度化を促すための工夫をさらに行っていきたい。
(2)	研究発表	大学	スピーキング	横澤聡子(神奈川大学大学院生)・鈴木祐一(神奈川大学)	Interleaving effect —文法スピーキング練習を効果的にデザインする—	日本人英語学習者文法習得において、手続き的知識を獲得することは難しい。一般的な文法学習では、ターゲットとなる文法事項をブロックに分けて教えるという方法が多いが、本研究ではこのブロック学習(以下、Blocking)とは異なるInterleavingという方法に注目し、その効果を検証した。本研究では、日本人英語学習者(大学生)を対象として、関係代名詞をターゲットとした口頭での文法練習(スピーキング練習)において、BlockingとInterleavingではどちらがより効果的かを比較した。同時に関係代名詞の既知知識の高低によりその効果に差はみられるのかどうかを調査した。
(3)	研究発表	高校	スピーキング	高橋有加(東京外国語大学大学院生)・根岸雅史(東京外国語大学大学院)	日本人高校生のスピーキングデータから見る発達傾向 —語彙・文法・テキストの3観点から—	本発表では、日本人高校生約300人がアルク株式会社の「英語スピーキング能力試験TSST」を2015-2016年度の計2回受けた際のデータの書き起こしデータを用い、各CEFRレベルごとに、語彙・文法・テキストの3観点から発達傾向を明らかにすることを目的とする。分析として、語彙の観点からは、学習者のレベルごとに異なり語頻度表を作成し、使用されている語彙レベルの分布を集計した。文法に関しては、中学校で習う主要な文法項目の使用頻度を集計した。テキスト分析としては、平均文長などをレベル別に算出した。分析の結果、異なり語の使用量はどのレベルでもA1 > A2 > B1 > B2 > C1 > C2という頻度が保たれていた。文法については、中学1年生で習う文法が主として用いられており、テキストの観点からはレベルが上がるにつれて平均文長が長くなる傾向にあった。これらを元に、より効果的なスピーキングの指導・学習について考察する。
(4)	研究発表	高校	スピーキング	根岸雅史(東京外国語大学大学院)・郭 淑佳(東京外国語大学大学院生)・岡部康子(ベネッセコーポレーション)	スピーキングテストの出来とコミュニケーションの意欲は関係するか—Willingness to Communicateによる分析—	本研究では、日本人英語学習者のWillingness to Communicate(以下WTC)と英語スピーキングテスト結果との間の関係性について調べた。2校の高校生に対して、スピーキングテストとWTCの質問紙調査を実施し、そのうちの1校の生徒は、GTEC for STUDENTSのスピーキングテスト(タブレット型)を受け、もう1校の生徒は、授業内で行われる1対1の対面型のスピーキングテストを受けた。WTCに関しては、二校の学生の様相は類似しており、どちらも友人との1対1という状況での得点が最も高く、知らない人との1対1という状況での得点が最も低かった。タブレット型のスピーキングテストとWTCの間にはほぼ相関が無かったのに対し、対面型のスピーキングテストとWTCの間には、タブレット型のものよりも強い相関があることがわかった。この結果は、スピーキングテストの形式によってWTCの影響の程度は様々であるということを示唆している。

第1日目(8月26日) 午後 第2室(103講義室) (1)13:00 (2) 13:40 (3) 14:20 (4) 15:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	大学	テストイング	土平泰子(聖徳大学)・中村優治(慶応義塾大学)・秋山朝康(文教大学)・宮崎 啓(東海大学)・伊藤泰子(神田外語大学)	スキル統合型ライティングテストにおけるストラテジー	本研究では、Barkaoui et al. (2013)の研究を受けて、TOEFL-iBTのスキル統合型テスト項目の解答ストラテジーを自由筆記により調査した。被験者は日本人大学生90名で、Barkaoui et al. (2013)がスピーキングテストに関して調査したのに対し、ライティングのテスト項目についてCollins (2012)の問題を使用して分析を行った。解答者の記述はアプローチ、コミュニケーション、認知的、メタ認知的、情意的などのカテゴリーによって分析された。記述には試験形式や難易度に関するものが特に多く見られ、日本人学習者がまだスキル統合型テストに不慣れであることや、ライティングテストという解答形式に対する能力不足が重要な問題であることが分かった。スキル統合型テストをどのように導入することが学習者や授業により影響を与えるのか、今後さらに検証・議論していく必要がある。
(2)	研究発表	高校	テストイング	宮崎 啓(東海大学)	大学センター試験と外部試験活用に関する一考察	センター試験は2020年度に外部試験に全面移行する案と、併用する案が文科省より発表されており、現在実施性を検討中である。これは産出能力を含めた測定を目的とする原案ではあるものの、センター入試との併用の場合は受容能力テストの比較が必要である。センター試験と外部試験を比較する研究はいくつかあるが(Guest, 2008; 三橋, 2015)、難易度の他にテスト構造や受験者意識を含めた妥当性の検証はあまり見られない。本発表はセンター試験と、併用試験としては可能性の低いTOEICを比較し、その理由を明らかにする。両テストの難易度比較の他に錯乱肢分析と受験者の意識調査も含めて、代用使用として適切かどうかを考察する。106名の高校3年生を対象に両テストサンプル問題を受けてもらい、難易度や錯乱肢分析を行った。また43名の受検者にテストの印象を聞いた。その結果、TOEICは語彙や場面理解が難しく、当て推量解答もあったことがわかった。
(3)	実践報告	中学	テストイング	亀山弘二郎(横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校)・斉田智里(横浜国立大学)	学習到達目標・年間指導計画・学習評価三位一体の英語指導体制の構築 —CAN-DOリスト形式での学習到達目標の設定と指導・評価改善のための活用—	次期学習指導要領実施に向けて、各学校においてはCAN-DOリスト形式で学習到達目標を具体的に設定し、それらを学年別の年間指導計画に位置付け、できるようになったことを3観点、5領域で把握するための具体的な評価方法を明らかにすることを通して、指導と評価の一体化による改善を行うことが課題となっている。本稿では以上の課題を共有し授業改善に取り組んだ、横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校の実践を報告する。当校では平成26年度より、学習到達目標をCAN-DOリストの形式で作成し、年間指導計画と関連付け、単元の学習内容や評価方法とともに記している。平成27年度からはCAN-DOリストを生徒と共有するための「共有CAN-DOリスト」作成、平成28年度には学習到達目標の達成状況を把握するため、筆記テストとパフォーマンス課題による評価の分析を行った。生徒の回答状況の情報も含めて英語科全体で共有し、PDCAサイクルによる授業改善を行っている。
(4)	研究発表	高校	テストイング	大田悦子(東洋大学)	高校生はどれくらい英文を再生できるか？—Dictation Testで見る中学英語の定着度合—	Sherpaが2016年に約5300名の高校生に実施した英語基礎力定着調査で、高校生の「読むスピード」は非常に遅く(平均73 wpm)、「聞いて理解する力」も限定的であり、単純な英文でも「書ける量」は少ない(5分間で約4文)ことが明らかになった(金谷, 2017)。この結果が意味するのは、高校でも中学英語定着のための手立てが必要であるということである。今回は先の調査で分析対象としたDictation Testのデータ(347名分)と、分析には使わなかった別versionのDictation Testのデータ(新規614名分)を合算し、両テストで共通に出題された8つの英文の正答率や解答傾向を学力レベル別に比較することにした。その結果、英文の長さにも最も影響を受けやすいということを再確認した。また、レベルが下がる毎に正答率も下がり、Dictation Testで測っている力が「偏差値」を概ね反映しているということも分かった。

第1日目(8月26日) 午後 第3室(104講義室) (1)13:00 (2) 13:40 (3) 14:20 (4) 15:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	大学	学習者	HAYASHI Chiyo (Kunitachi College of Music)	“Choice” in EFL Classrooms	The purpose of the current study is to explore whether or not giving students choices in Japanese college classrooms will enhance motivation for learning English. Self-determination theory posits that “autonomy”, “competence”, and “relatedness” are cross-culturally universal psychological needs that promote healthy functioning in diverse social environments, including academic settings. Some cross-cultural researchers, however, have argued that one of the basic needs, the experience of “autonomy”, does not apply to students in Eastern cultures where they do not value “autonomy” as much as those in Western individualistic cultures do. To shed light on the argument, the present study aims at exploring how Japanese college students perceive “choice”, one of the most autonomous behaviors. The participants of the current study were 70 students who were enrolled in five English classes taught by the author. They took part in a project which used TED Talks as materials. After studying three TED talks on music, students were asked to give a presentation with a title, “Talk like a TED speaker”, on any topic they wanted to talk about. They were specifically told that the topic should be interesting, meaningful, and inspiring for listeners. After finishing presentations, they filled out a questionnaire on how they perceived having a choice in choosing their presentation topics and content. The questionnaires were analyzed using both descriptive statistics and qualitative analysis. An overwhelming number of the students (59%) acknowledged the value of having a choice in their classrooms while 15% students mentioned that they preferred being given a topic.
(2)	研究発表	中学	学習者	中島義和(お茶の水女子大学附属中学校)	英語科における「真正の学習」・「深い学び」を探究する授業デザイン—Agarの「リッチ・ポイント」の概念に基づいて—	本研究では、「真正の学習」と呼ばれる教科の本質に迫る学習や、実践的・汎用的な資質・能力を伸ばすことを目指す学習をデザインした授業実践を文化人類学者Agar(1996)の「リッチ・ポイント」の概念に基づき生徒の「深い学び」と関連づけて検討する。実践は、中学3年生を対象に沖縄に関する読み物教材を与え、「平和・人権」をテーマとして実施したグループパフォーマンステストである。事実を読み取り、問題点や課題、解決策を考え、英語で発信するという学習活動をグループで展開し、ふり返りを行った。活動の観察から、自らと他者の知識や意見が接触・交流することで「差異」が顕在化し、その「差異」が個々の考えを深化、変容させ、新たな学びを創出する様子が見られた。これが「リッチ・ポイント」であり、協働的な課題解決の学びのプロセスを通して生み出される。そこには、教科の本質を味わう「真正の学び」が生まれ、「深い学び」を誘発するものと考えられる。
(3)	研究発表	高校	学習者	若松直樹(横浜国立大学大学院生)	英語授業に対する高等学校生徒の意識と学習者要因・英語熟達度の関係 —動機づけ、学習スタイル、学習方略、英語熟達度から検討して—	本研究では、(1) 高校生が授業内で英語使用を好む場面の調査、(2) 授業内の英語使用に対する高校生の意識と学習者要因、英語熟達度の関係を明らかにすること、(3)「授業は英語で行うことを基本とする」の授業を受けている高校生の変化を明らかにすることを目的とする。公立高校普通科2年生を対象に4種類のデータ収集を実施した。(1) 授業内の英語使用の場面、学習者要因に関する質問紙の実施。(2) TOEIC Bridgeを用いた英語熟達度調査の実施。(3) 生徒による授業の振り返りを実施。(4)「授業は英語で行うことを基本とする」の授業を定義するため、COLT PART A改訂版を用いた授業観察。現在までに、教室での英語使用と正の動機づけとの間の関係性を見るために、ピアソンの積率相関係数を算出した結果、有意な正の相関関係が認められた。また、教室での言語使用と負の動機づけとの間の関係性を見た結果、有意な負の相関関係が認められた。

(4)	研究発表	その他	学習者	飯島睦美(群馬大学)	英語学習者の英文読解における音韻意識の果たす役割 — 聴覚障がい学生とディスレクシア傾向の学習者への指導より—	人間の情報処理過程における「音韻符号化能力」の最重要な役割については、認知言語学、心理言語学、英語教育学、特別支援教育分野—特に聴覚障がい教育、読み書き障がいを持つ学習者への指導など—といった複数の分野において議論されてきている。だが、残念ながら、これらの知見が横断的に且つ学術的に統合されて、実際の教育現場での指導に反映されたり、学習者各々に適切な学習方法が提案されているかということに関しては、十分とは言えない。本論では、まずはそれぞれの分野での先行研究を俯瞰しまとめ、実際に行ったディスレクシアの学習者への英語学習指導と聴覚障がい学習者への聞き取りから、小学校から本格的に始まる英語教育における音韻意識の具体的指導方法を提案しようとするものである。
-----	------	-----	-----	------------	---	---

第1日目(8月26日) 午後 第4室(201講義室) (1)13:00 (2) 13:40 (3) 14:20 (4) 15:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	大学	ライティング	須田洋平(横浜国立大学大学院生)	PPPの授業・TBLTの授業が与える文法的知識とライティング能力における効果の比較	本研究の目的は、Task-Based Language Teaching(TBLT)とPresentation-Practice-Production(PPP)の2つの授業が与える英語学習者の文法的知識とライティング能力における効果を比較検証することである。実験参加者は英語教育専攻の日本人大学生16名であった。参加者はTBLTの授業を受ける実験群と、PPPの授業を受ける対照群に分けられ、事前・事後テストとして両群ともに共通のテストに取り組んだ。テストは、和文英訳の文法テストと英語の模擬授業のビデオを視聴後に行ったライティングレポートであった。結果によれば、有意差はみられなかったものの、文法テスト・ライティングレポートともに事前・事後テストの平均点の伸びがPPPの方がTBLTよりも高かった。この実験ではTBLTの有効性は見られず、それには実験期間の短さも要因であることが考えられる一方で、PPPの短期的な有効性が示唆された。
(2)	研究発表	大学	ライティング	塩川春彦(帝京科学大学)・金田 拓(帝京科学大学)	大学入試自由英作文論題におけるジャンル(テキストタイプ)の多様性の探求	本研究では、2000年から2016年までの全国の国公立大学で出題された自由英作文問題(1584題)を対象に、Watanabe (2016)らのSFLの知見に基づき、大学入試で厚くあつかわれていないジャンルにはどのようなものがあるか、を探った。次いで、大学入試で厚くあつかわれていないジャンルの特性は、大学入試における実現可能性の観点から障害となり得る要素を含むか、を考察した。さらに、入試で厚く扱われていないジャンルを書かせる英作文問題にはどのようなものがあるかを、過去の入試問題、海外の評価の定まった英語検定試験などの問題群を参照しながら探った。参考文献: Watanabe, H. (2016). Genre analysis of writing tasks in Japanese university entrance examinations, <i>Language Testing in Asia</i> , 6(4), 1-14.
(3)	研究発表	大学	ライティング	久島智津子(津田塾大学)	大学生のライティングパフォーマンス傾向の分析—オンラインポートフォリオの利用—	本研究は、オンラインシステムを活用した大学生のライティングパフォーマンスの傾向を考察したものである。本システムには、個人の入力領域と参加者との共有領域があり、学習者が他者やモデルのライティングから学べる仕組みである。語数、異なり語数がのべ語数に占める割合(Type/Token)、文数、1文当たりの平均語数、JACET8000に基づく語彙レベルの指標が可視化されるポートフォリオ機能も備えている。本研究でメール文の学習者のライティングとモデルとの比較分析を指標に基づいて行った結果、レジスターによるパフォーマンスの差が見受けられた。友人宛でのメールでは、学習者の平均値は、1文当たりの平均語数、従属節が節数に占める割合(DC/C)、Type/Tokenでモデルと比較的近い値を示した。メール文は話し言葉と書き言葉の中間に位置する言語特徴があり、友人宛の場合は、話し言葉に近く複雑な文構造が多用されず、二者に大きな差がなかったと考えられる。
(4)	研究発表	大学	ライティング	隅田朗彦(日本大学)	EFLライティング学習におけるプレタスク・ポストタスクの効果—明示的文法プレタスクと明示的フィードバックは文法習得を助けるか—	本研究はプレ・ポストテストデザインを用い、教室におけるライティング学習において、ライティング・プレタスクとしての明示的文法指導およびライティングに対する明示的修正フィードバックおよびその組み合わせが、目標文法事項(従位接続詞を含む複文)の習得に有益であるかを調査したものである。53人の日本人大学生を調査対象とし、パラグラフ・ライティングを行う際に、明示的文法指導と明示的フィードバックのどちらか、あるいは両方を受けたグループと、どちらも受けなかったグループを設定し、指導後にグループ間に目標文法の習熟度の差があるか否かを検証した。指導1週間前、指導直後、指導2週間後で、目標文法事項の理解度を測る誤文訂正テストと、目標となる複文の使用を多く誘発するようなトピックを選定した自由英作文を課した。分析の結果、文法指導の明示性およびフィードバックの有無がテストのスコアの推移に異なる影響を示した。

第1日目(8月26日) 午後 第5室(202講義室) (1)13:00 (2) 13:40 (3) 14:20 (4) 15:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	中学	リーディング	姉崎達夫(新潟県長岡市立関原中学校)	書記体系が単語認識に及ぼす影響の性差	単語認識の反応時間は、書記体系に関わらず、女子の方が男子よりも有意に速かった。女子は単語認識を速く処理し、ボトムアップ処理が優れている。このことが女子の読解力の向上につながっている可能性が示唆された。
(2)	研究発表	大学	リーディング	稲岡 類(筑波大学大学生)	英語学習者の音読プロソディと内容理解の関係性	音読を評価する観点としてプロソディ、流暢性、構成理解が挙げられる。プロソディは発音・アクセント、イントネーション、チャンキングに分けられる。子どもの母語話者を対象とした音読の研究では、読解力と音読のパフォーマンスに正の相関が確認されているが、EFL学習者を対象とした研究はあまり多くない。本研究では、日本人EFL学習者を対象として、音読のプロソディと内容理解の関係性を調べた。調査では日本人大学生24名に音読タスクと筆記再生課題、読解熟達度テストを課した。取得した音読データの得点と筆記再生課題の再生率を変数として相関分析を行った結果、2つのテキストのいずれも音読の得点と筆記再生率の間には有意な相関がみられなかった。また、音読得点の各観点の間には弱いもしくは中程度の相関がみられた。本発表では以上の結果から考えられる考察並びに教育的示唆について議論する。
(3)	研究発表	その他	リーディング	中田悠斗(東京学芸大学大学院生)	フレーズの加速提示トレーニングが読みの流暢性にもたらす効果	日本人英語学習者のreading fluencyを向上させるべく、限られた時間の中で行えるfluency向上の活動「フレーズの加速提示」に関する研究を行った。調査では日本人大学生を2グループに分け、一方に加速提示トレーニングを、もう一方に紙面によるフレーズ速読トレーニングを実施してもらった。トレーニングの前後にテストを行い、WPMと内容理解の2つの観点からトレーニング効果を検証した。結果としては、事後テストとして同じマテリアルを読んだ際は両群ともにWPMが向上した。しかし、異なるマテリアルを読んだ際は、両群ともWPMは向上しなかった。内容理解に関しては、同じマテリアルを読んだ際、実験群が理解度を落としてしまったが、統制群は理解度を維持した。また、異なるマテリアルを読んだ際は、両群の内容理解度が下がった。上記の結果から、フレーズの加速提示とフレーズ速読の両方が学習者の読みの速さの向上に有効な活動であるのではないかと考えられた。
(4)	研究発表	大学	リーディング	川島葉月(筑波大学大学院生)	タスク教示が明示情報・暗示情報理解に与える影響—再認課題による検証—	英語教育におけるタスク教示の効果が注目を浴びている。再話とは読解後に原稿を見ずに内容を知らない人に語る活動で、推論生成とより深い読解を促すとされる(Kai, 2008)。要約とは情報を抜粋、統合して要旨を作成する活動で、メインアイデア理解とマクロルール使用を促すとされる(van Dijk & Kintsch, 1983)。再話・要約という2つのタスクの比較を行った研究は十分ではない。本研究では再話・要約教示によってテキストの明示情報、暗示情報の理解に違いがあるか、再認課題により検証した。結果から、明示情報については、要約よりも再話でよりよく理解することが示された。再話では読んだ内容を聞き手に上手く伝えるために、情報をつなぎ合わせながら理解していたためであると考えられる。暗示情報については、教示にかかわらず、推論を行いながら理解していることが示された。教師は再話・要約の特性を理解し、教室の中で活用していくことが求められる。

第1日目(8月26日) 午後 第6室(203講義室) (1)13:00 (2) 13:40 (3) 14:20 (4) 15:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)						第6室第1枠(13:00-13:30)の発表はありません。
(2)	研究発表	大学	早期英語教育	伊藤摂子(東洋大学)	小学校外国語活動指導のためのテキストの考察—教員養成課程大学の外国語活動指導で用いられているテキスト分析を通して—	小学校の外国語活動は2020年度から高学年で教科化される。そのため、小学校の外国語活動は外国語科としての教科教育法の1科目として教員養成課程の教員免許取得の必要な単位の中に組み込まれることになっている。今後は必要な科目として組み込まれ、これまでのような任意での単位取得ではなく、小学校教員免許取得を目指す全ての学生のために大学においても指導を行う必要が有る。そのような中、小学校教員養成課程における学生指導のために、現在の外国語活動に関する科目を提供している養成課程大学では、大学教員が指導をする際にどのようなテキストを用いているのか、それらテキストの中で指導する際に取り上げられている内容についてテキスト分析をし、今後教科化に向けて指導をする際の、テキストのあり方について検討をする。
(3)	実践報告	小学校	早期英語教育	阿部志乃(横須賀学院小学校)・酒井志延(千葉商科大学)	チョコレート・プロジェクト—カカオ豆からガーナにつながる—	外国語を学ぶ際、学習者にとってその言語を使う経験を通した「面白さや楽しさ」と、使う「必要性」が大切である。小学校では特に「必要性」をどのように設定するかが、将来の外国(語)に対する意欲に大きく影響する。本発表では5年生が取り組んだ「チョコレート・プロジェクト」を紹介し、児童の活動とその過程での気づきを報告する。このプロジェクトでは本物のカカオ豆に触れ、英国の教材“The Story of Chocolate”や英語の初心者用地図帳を使ってカカオ豆や産地について調べ学習を行い、実際にカカオ豆からチョコレートを作り、英語と日本語を使いながら産地と消費の関係をグラフなどで学習した。その学習の過程において日本とガーナの経済格差や児童労働という問題に気がついていった。このような活動の中で児童は意識せず英語を使い、世界の問題に気がつくことが多い。小学生でも必要性があれば英語を通して学ぶことが可能であることを児童の感想を通して紹介する。
(4)	研究発表	小学校	早期英語教育	淡路佳昌(大東文化大学)・静 哲人(大東文化大学)	小学校教員対象のグルグル発音指導の効果—音素別、状況別の自己認識と実際のパフォーマンス—	小学校教員に対する英語発音指導の効果を質問紙および実際のパフォーマンスによって測定した。日本人学習者が困難を覚える6つの音素がそれぞれ複数回生起する8つの目標文を作成した。24名の小学校教員を対象として、(1)自己申告発音能力調査質問紙回答【事前】、(2)目標文の音読録音【事前】、(3)音素別および単語レベルの一斉指導、(4)目標文を用いた文レベルの音読一斉指導、(5)目標文の「グルグル」指導、(6)目標文の音読録音【事後】、(7)自己申告発音能力調査質問紙回答【事後】という手順で、(A)事前と事後の自分の発音能力に関する認識の質問紙データ、(B)事前と事後の目標文の音読録音データ、(C)グルグル指導時の録音データ、を収集した。一斉指導とグルグル指導を組み合わせることによって、小学校教員の英語発音能力は明確に向上することが確認できた。発音能力の自己評価にも大きな向上が見られた。

第1日目(8月26日) 午後 第7室(305講義室) (1)13:00 (2) 13:40 (3) 14:20 (4) 15:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	小学校	早期英語教育	栗原文子(中央大学)・中山夏恵(文教大学)	CLILにおけるCultureとCommunityに関する一考察—イタリアの小・中学校のCLIL授業を中心に—	外国語学習の目的は目標言語の習得だけでなく、複数の言語や文化の学習を通して、「異文化間性(interculturality)や異文化に対する認識、技能、ノウ・ハウを習得する」ことも含まれる(Council of Europe, 2001, p.43)。CEFRの理念に基づき、ヨーロッパで推進されているCLIL(Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習)では、「4つのC」、すなわち、Cognition, Content, Communication, Culture/Communityが重要な要素とされる。本発表では、イタリアの小・中学校におけるCLIL授業観察の記録と担当者へのインタビュー結果から浮き彫りになったCulture/Communityに関する意識的な働きかけ、例えば、多様な物の見方や考え方を理解する活動、他者と協同して学習する活動について報告する。
(2)	研究発表	高校	指導法	川澄典子(関東学院高等学校)	大学生向けCLIL教科書を用いたSoft CLIL授業実践—日本の高校生はどのように受け止めるか—	本研究の目的は、CLILが日本の英語教育において貢献していくために、勤務校の高校3年生に対して大学生向けCLIL教科書を用いてSoft CLIL授業を行い、学習者はCLIL授業をどのように受け止めるか、CLIL授業は学習者の言語不安を軽減するのかを、授業観察と事後アンケートから明らかにすることである。CLIL授業を1週間(4時間)実施する中で、生徒が英語で学ぶ授業と英語を学ぶ授業に取り組み、積極的に英語を使うようになる場面が見られた。授業観察およびアンケートの結果から、学習者がCLIL授業を肯定的に受け止めたことが明らかになった。また、CLIL授業を通して、間違いを恐れず英語を使用するという英語に対する積極的な態度が見られ、CLIL授業によって学習者の言語不安が軽減されたと言える。
(3)	実践報告	中学	指導法	松津英恵(東京学芸大学附属竹早中学校)	学びのプロセスを重視した英語学習ポートフォリオの活用—中学校での実践—	ポートフォリオを使用することで、生徒たちに各単元での学習内容や題材についての理解や学習の成果をふりかえりを促すことができる一方、担当する教員としても、生徒たちの記述から授業での指導手順等を検討する材料として活用できる。中学生を対象に実施したポートフォリオを使用した実践の報告をする。昨年の発表では、中学生用に作成した“My Learning Mate”(以下、MLM)を使用し始めた段階での実践と生徒たちの反応について報告を行ったが、今回はその後の生徒たちの変化や取り組んだことや生徒の作品等から見取れることがら、また教師がどのようにしたかなどについて報告したい。
(4)	実践報告	大学	指導法	海上順代(東京都立産業技術高等専門学校)	高専4年生を対象にしたTOEIC IP Test対策と指導	発表者所属の高専本科4年生の英語の授業実践を、TOEIC IP Testスコアと同学生の3年次のTOEIC Bridgeのスコアと比較しながら検証した。調査方法としてTOEIC IP TestのOfficial Score CertificateにあるAbilities Measuredの項目の正解率とトータルスコアを比較し、語彙と文法の力が中級以上のスコア獲得には必要と推測された為、語彙と文法の伸び率や定着を見る為に同調査対象学生の3年次全員受験のTOEIC BridgeのOfficial Score Certificateにある「サブ・スコア」の5分野(Vocabulary, Grammarを含む)の3段階評価と小テストの語彙と文法問題の解答率を参照した。調査結果として、ある一定の文法力の定着がなければ、高専4年生相当の平均スコア以上を取ることが難しいと分かった。文法の定着を図る上でも小テストを継続する必要性が確認された。

第1日目(8月26日) 午後 ポスター発表(206講義室) 13:00~15:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	その他	政策制度	青田庄真(東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員)	地方自治体の英語教育政策—教育振興基本計画における成果目標に着目して—	政府は、教育基本法(2006)に基づき教育振興基本計画(以下、「計画」)を策定する義務を負っており、同様に、地方公共団体は、それを参酌して「計画」を策定する努力義務を負っている。公立学校における教員採用等は主に都道府県や政令指定都市が担っているなど、地方公共団体の「計画」における英語教育を明らかにすることは、日本の英語教育政策過程全体を議論する上で重要である。本研究では、政府の「第2期教育振興基本計画」およびそれに関する「英語教育実施状況調査」、さらに、全ての都道府県および政令指定都市における「計画」において、成果指標がどのように扱われているのかを検討した。その結果、「計画」において「英検」に触れている都道府県は23件存在した。また、そのうち高校英語教師の英検準1級等取得率75%を超えているのは6件(全体で12件)であった。さらに、その経年変化から政府—自治体—教師の影響力が限定的である点が指摘された。
(2)	研究発表	その他	語彙	山本長紀(木更津工業高等専門学校)・瀬川直美(木更津工業高等専門学校)・岩崎洋一(木更津工業高等専門学校)	工業高等専門学校における科目横断型語彙学習の実践—語彙の長さによる繰り返し学習の効果検証—	本研究は、高专における工学系英語語彙学習の実践を報告するとともに、特に繰り返し学習の有無が、学習する語彙の長さによって効果として現れるかどうかを検証することを目的とする。瀬川・山本・岩崎(2017)では、7文字未満の語彙の学習に関して、繰り返し学習ありのほうが、繰り返し学習なしよりも目標語彙の定着に効果があると数量的に確認された。そこで本研究では、7文字以上の語彙に焦点を置き、語彙の長さの違いにより繰り返し学習の効果がどのように現れるかを探る。本実践前後に行った語彙テストのより、繰り返し学習は短い単語の定着のみ効果的であることが明らかとなった。加えて長い単語の定着については繰り返し学習なしの定着状況とほぼ同じであることが確認された。より効果的な語彙定着を目指し、繰り返し学習を取り入れた工学系語彙学習指導法を探求する必要がある。
(3)	研究発表	高校	カリキュラム	黒川智史(東京大学大学院生)	外国語科目におけるアクティブラーニングの課題—高等教育との比較を通して—	2020年度改訂予定の次期学習指導要領には、「言語活動の重視」「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学習」などが記され、いわゆるアクティブラーニングが導入される。しかし外国語科目において想定される課題は未だ述べられていない。そこで筆者は高等教育機関で実践されているアクティブラーニングの実践や手法を考察し、中等教育で実践される際に起こりうる課題を明確に指摘し、さらに中等教育でのみ発生しうる課題も同時に指摘する。調査の結果、高等教育機関のアクティブラーニングは、米国では理系科目において一定の効果が認められ、日本における実践では教師、学習者共に高評価であった。中等教育で行う際には、(1)アクティブラーニング型の教室の不足(2)1時限で「深い学び」を実践しづらいこと、外国語科目特有の課題は(1)目的言語を使用して「深い学び」を行うのは困難(2)文法教育が難しい(3)教師が生徒の躓きを感知しにくいという課題が浮かび上がった。

第1日目(8月26日) 午後 大講義室 15:50~17:30

シンポジウム	外国語教育における「学びに向かう力・人間性等」の指導と評価	シンポジスト兼コーディネーター: 峯島道夫(新潟医療福祉大学) シンポジスト: 三浦孝(前静岡大学)、松沢伸二(新潟大学)
--------	-------------------------------	--